

オッカムにおける 原初的述定と命題の構造

清水哲郎

本論の考察は、オッカム論理学の命題ないし代表の構造に関する、諸研究にはほぼ共通した理解と対決する議論を通して進められる。すなわち、その理解が、(1) 無様相の現在命題においても問題を含んでおり、さらに、(2) 様相命題、特に現に存在しない存在可能な個体に言及する命題、および、(3) 否定命題については、量化記号の解釈も含めて、通用しないことを論じる。また、これらの批判的作業に伴って、積極的には、より原初的な述定を認める必要があること、および、それを認めた場合に命題の構造について言えることを提示する。最後に、(4) この原初的述定から、言葉と世界を巡るオッカムの根本的洞察を抜き出したい。

1 主＝述構造説と無様相現在命題

1・1 オッカムはある肯定命題が真であるのは「主語が代表するものと、述語が代表するものが同一である場合」だと言う(主・述同一則)¹⁾。また、命題を構成する項辞の個体代表の仕方に注目し、問題となる項辞が特定の一個体を代表するのではない場合に、それを特定の一個体を代表する表現(すなわち項辞が指示代名詞+普通名、または固有名である場合であって、以下これを〈個体名〉と呼ぶ)を使ってどう言い替えられるかを説明する²⁾。例えば、

「或る人間は白い」 homo est albus. 1

は、主語が何を代表しているかに注目して、

「この人間は白い」か「あの人間は白い」か……である 2

と、単称命題の選言へと展開できる（以下、これを〈DD 展開〉と呼ぶ）。また、命題のタイプおよび問題にする項辞が主語であるか述語であるかによって、単称命題の連言への展開（DC 展開）や個体名（特定一個体を代表する語）の選言への展開（DDP 展開）が可能な場合もある³⁾。

このようなところから、個体代表を巡る諸研究者の議論のほとんどは結局、オッカムにおける命題は〈主語の代表する個体＝述語の代表する個体〉（ただし、 $a = b$ は a と b が同一であることを示す）を表わしていると解すものである⁴⁾。このような理解を以下では〈主＝述構造説〉と呼ぶことにする。例えばギーチがオッカムの立場を two name theory と呼んだ際に理解していたものも、この主＝述構造説に含まれる⁵⁾。

さて、この主＝述構造説による命題の論理構造をもっともよく表現するのは、何人かの研究者によって採用されている、次のような表記法であろう⁶⁾。すなわち、普通名「人間」を h また「白いもの」を a で表わすと、1 は

$$\exists h \exists a (h = a) \quad 3$$

（或る人間、或る白いものについて、「人間は白いものと同一である」である）となる。

また、「この人間」「あの人間」等、個々の特定の人間個体を一意的に指す（代表する）名を h_1, h_2, \dots, h_n で表わすと（この場合、人間の総数は n 人であり、 h_1, h_2, \dots, h_n でその全てを万遍なく呼び分けられるとする⁷⁾）、3 の DD 展開（2 に対応する式）は次のようになる。

$$\exists a (h_1 = a) \vee \exists a (h_2 = a) \vee \exists a (h_3 = a) \vee \dots \vee \exists a (h_n = a) \quad 4$$

或る研究者達⁸⁾ は更に、2 ないし 4 の選言肢のそれぞれが、例えば、

$$\exists a (h_1 = a) \rightarrow (h_1 = a_1) \vee (h_1 = a_2) \vee (h_1 = a_3) \vee \dots \vee (h_1 = a_m) \quad 5$$

（「この人間はこの白いものである」か「この人間はあの白いものである」か…）と DD 展開できると考える（ただし a_1, a_2, \dots, a_m によって、全ての白い個体を万遍なく呼び分けたとする）。つまり、ここで、オッカムが実際に提示していることを越えて、先ず命題を構成する項辞の一つ（上の例では主語）を、特定個体を代表する項辞（個体名）へと展開し、次に他の項辞（この場

合は述語)に関する展開をするという, いわば〈二段階の展開〉を考える。そして, さらに, オッカムのやり方への批判⁸⁾をかわそうとする研究者は, 命題のタイプないし項辞の代表の仕方に応じて, どの項辞から展開を始めるのが適切かについてのルールを考える道に進む——これが「どこから分析を始めるか」priority of analysis の議論にほかならない⁹⁾。これによって, いわゆる多重量化を処理しようとするのである。ただし, このような二段階の展開はオッカムが実際に提示していることではなく, また分析順序に関するルールを導入すると, オッカムが実際にしている展開に反する主張をすることになるため, 何らかオッカムの理論の修正を主張せざるをえなくなる。

1・2 さて, 私はこのような解釈に否定的である。以下, その理由を提示する。まず〈二段階の展開〉がオッカムの代表理解とは異質であることの指摘から始めたい。

オッカムが DD, DC, DDP という 3 種の展開を提示した際に考えていたことは, 項辞が個体代表をしているが, 特定の一個体を代表するのではない場合 (つまり共通代表 *suppositio communis* の場合) に, その代表の仕方を, 特定の一個体を代表 (*suppositio discreta*) する語 (個体名) を使ってどう表現できるか, ということであった。つまりここでのオッカムの理論は, 共通代表をする項辞 s を含む命題 $f(s)$ を, 特定一個体代表をする項辞 s_n を含む命題 $f(s_n)$ から構成される複合命題 (*prop. hypothetica*) へと展開する仕方についての考察を核としていた。項辞の個体代表について問題にする以上, 不特定の個体を代表する項辞の代表の仕方を, 特定の個体を代表する項辞を使って説明するのは自然の成り行きであろう。

このような仕方は, オッカムの文脈を遡れば, 項辞が何を代表するかに関する, もっとも原理的な説明¹⁰⁾に由来すると解すべきである。このオッカムの基本的説明こそ, 項辞が代表しているものについて最も一般的に言えることだからであり, この説明を前提した上で, 個体代表に関する例の展開が出てくるからである (主・述同一則は文脈上はもっと後に登場するものであって, むしろこれらを前提とする帰結だと見るべきだろう)。そこで, オッカ

ムの基本的説明をパラフレイズして提示すれば、次のようになる。

「S est P の主語が代表するものを指示代名詞〈d〉によって指すならば、
 個体代表の場合には ① d est S が、一般に ② d est P が成り立つ。

また、述語が代表するものを〈d〉と指して、③ S est d が成り立つ」¹¹⁾。

①～③の〈d〉はまさに特定個体代表をする個体名であって、2,4 の各選言肢と同じ身分のものである。つまり、2,4 は 1 の主語が代表する個体の候補を次々と指しては②に当たる述定を行ない、それらのいずれかが成り立つことを言うために、それらを選言的に結合したものにはかならない。

では、命題①～③、ないし 2,4 の各選言肢を構成する項辞の代表については、さらにどのように説明できるのだろうか。例えば②に倣って言えば、1 の主語が代表する個体を「これ」hic で指して

hic est albus. 6

といえ、また、2,4 の選言肢の一つを取り出すという道を進めば、

hic homo est albus. 7

となる。だが、これらの単称命題の主語が何を代表しているかについては、もう①,②を適用し、その代表するものを指示代名詞を使って指して、何か積極的なことをいうことは出来ない。既に主語自体が指示代名詞を使った表現なので、何かを言うとしても、「これはこれだ」といった話になってしまうからである。

では、述語が何を代表しているかについてはどうか。ここで DD 展開が可能だとすると、5 で採用した記号を使えば、

(hic est a₁) ∨ (hic est a₂) ∨ …… ∨ (hic est a_m) 8

となろう。しかし、a₁, a₂, …… a_m は実際には hic albus, ille albus… (この白いもの、あの白いもの…) という仕方で決まるものなのである。そうであれば、主語が hic であって特定の一個体を指してしまっている以上、8 の選言肢の中で真となるものは、

hic est hic albus. 9

でしかない。つまり、8 のように白い個体すべてを取り出すという作業は無

駄なのである。しかも、9は6に比べて、何か付け加えていることがあるだろうか。

つまりここは「主語と述語とが同じものを代表する」ということが殆ど効いてこない場面である。むしろこれは次のように言うべきではないだろうか(以下、本論の主要な主張は〈Th.〉によって示す)。

Th. 1. 〈d est p〉において、〈est p〉は一まとまりとなって、述語である。「dとpとは同じものを代表する」という説明は有効ではない。つまり、「これ(この)」と指示してしまったら、その個体について「白い」かどうかは述べられるのであって、いろいろな白いものと比べる話にはならない。

そういうわけで、「或る人は白い」を展開したときの選言項の一つ「この人は白い」について、さらに述語項を展開するというのはオッカム的ではない。二段階の展開を認め、priority of analysisに関するルールを導入する考え方は、このような基礎的考察を忘れて、論理学の技術的手法面に関心の中心が移るときに起こることではないだろうか。オッカムがああ説明①②③を基礎に据えているかぎり、多重量化の分析の手法の話には行かないはずだというのが、ここでの私の帰結の一つである。

以上の考察は、また、主＝述構造説そのものに対する反論でもある。二段階の展開を実行しないとしても、命題の構造を3のように解すること自体が否定されるからである。すなわち、3に対応するDD展開の結果は4とならざるをえない。だが、4の選言肢の一つは、

$$\exists a (h_k = a) \quad (\text{ただし } k \text{ は自然数, } 1 < k < n) \quad 10$$

であって、特定の間個人が白い個体のいずれかと一致するということを表わしている。しかし、これは今や我々が行き着いている Th. 1 に反する理解である。

だが10は3に由来している。そして3が既に「或る人間個体と或る白い個体との一致」を表わしている。そうであれば、これがそもそも Th. 1 と相容れない理解であることになる。

「しかし」と、ここで異義がはさまれる。「オッカム自身が、主語が代表するものと、述語が代表するものが同一である場合、というような命題の構造を考えているではないか」。これに対して私はさしあたって、次のように言おう——オッカムはこのような構造を次のように表現するだろう。例えば、1は、

aliquid, quod est homo, est albus. 11

すなわち「或る人間であるものは白い」ということと解し得る¹²⁾。これはまさに1の主語の代表関係を①②を使って表現したものにほかならない。だが、これは3とは異なる構造を示している。これは決して、すべての人間個体とすべての白い個体とを比べて、一致する個体があるなどということではなく、むしろ或る個体——それは人間であるものとして把握されて取り出された個体である——について「白い」と述べられることを示しているからである。

2 様相命題における代表と命題の構造

主=述構造説に対する批判の第二の論点として、様相命題、特に可能様相の場合に、項辞が個体を代表するということが如何なることと解せざるをえないかを論じたい。

homo potest esse albus. (或る人間は白くあり得る) 12

を事例に考察を進める。これについてオッカムは二通りの解釈、すなわち、

解釈1: illud quod est homo potest esse albus. 13

解釈2: illud quod potest esse homo potest esse albus. 14

を考えている¹³⁾。13は実在する人間について白くある可能性を、14は人間が実在していない場合も含めて、人間が存在しかつ白い可能性を語るものである。これらも12に先の①②の理解を適用し、主語が代表するものを指示代名詞〈illud〉によって指した上で、それについて〈est homo〉ないし〈potest esse homo〉と言えること、かつその同じ〈illud〉に対して〈potest esse albus〉と述定されることを表現したものにほかならない。

ところで、Th. 1において私は、〈est s〉〈est p〉は一まとまりとなって述語なのであって、〈d〉と〈s〉や〈p〉がコプラ〈est〉によって結合されていると解してはならないと主張し、ここから主＝述構造説の問題点を指摘した。以下では、これらの主張を補強しつつ、指示代名詞〈illud〉によって指される個体は何かという問題があることを指摘したい。すなわち、私の主張は次の通り。

Th. 2 現時点で指示の働きをしない指示代名詞〈d〉が入ってくると、「この人、またあの人」といった選言ないし連言による分析が出来なくなる。あるいは、出来るとしても、それは先立つ原初的述定が成立するかどうかの判断に依拠して出来るのであって、決して逆ではない。

以下解釈1および解釈2の場合毎に検討する。

2・1 解釈1，すなわち主語は現に存在する個体を指しており，それについて，可能性が述べられている場合．この時，「fは可能である」を◇fと表記すると，主＝述構造説に従えば，12，13は，

$$\exists h \diamond \exists a (h=a) \quad 15$$

すなわち、「或る人間について、『或る白いものがあって，その人間とその白いものが一致すること』が可能であるといえる」と解される。

④ この場合主語については有限項から成る選言命題へのDD展開が成り立つ．その各選言肢は可能命題となる．すなわち，12の展開は，

$$h_1 \text{ potest esse albus } \vee h_2 \text{ potest esse albus } \dots$$

では $h_n \text{ potest esse albus}$ については何が言えるか——これについては，以下の⑤-2の議論に準じて考えられる。

⑤ では，述語の代表に関する選言命題へのDD展開はどうなるか。

⑤-1 先ず単純に，現に白いものを a_1, a_2, a_3, \dots として，

$$h \text{ potest esse } a_1 \vee h \text{ potest esse } a_2 \dots \quad 16$$

$$\exists h \{ \diamond (h=a_1) \vee \diamond (h=a_2) \vee \dots \} \quad 16'$$

とは展開できない．というのは，これは可能性を述べているようであるけれども，実は，現に白い人がいる場合のことしか記述していないからである。

現に白い人がいない場合は, 16, 16' は妥当しない. 何故なら, 今は人と一致しないが, 一致し得る白い個体などというものはないからである. つまり, 現にある a_1, a_2, \dots のどれもが h と同一ではないならば, また, どれも h と同一ではあり得ない. 従って, これは, 或る人がいて現に白くはないという場合に, その人が白くなる可能性を記述してはいない. そういうわけで, これは全く不十分な表記と言わねばならない (但し, 「可能である」ということを, 事実認識の可能性の話ととるならば, このような表記が成立するかもしれないが, オッカムはそのような話をしていない).

⑥-2 では, 現に白くない人が白くなる可能性を, それも人間個体と白い個体との一致の話として表現するにはどうしたらよいか. 例えば, 現実の状況 (世界) 以外に, 可能な状況 w^i (ただし i は自然数) なるものを設定して, w^i において存在する白い個体を $a^i_1, a^i_2, a^i_3, \dots$ として, w^1, w^2, \dots のどれかにおいて, 或る人間が或る特定の白い個体 a^i_n と一致する場合 (すなわち, $\exists h (h = a^i_n)$) があると考えてみよう. すると 15 は次のように展開される¹⁴⁾.

$$\exists h \{ (h = a^1_1 \vee h = a^1_2 \vee \dots) \vee (h = a^2_1 \vee h = a^2_2 \vee \dots) \dots \} \quad 17$$

だが, 現に存在しない白い個体を「あの可能状況における, この白い個体」などと個々に区別して指すことはできないのではないか. そうであれば, 17 は何かを問わねばならない (\Leftrightarrow 2.3 へ).

⑥-3 解釈 1 については次のように考え進めることも出来る. すなわち, 12 は,

$$\text{homo est potens esse albus} \quad 18$$

であって, つまり述語は「白くあり得るもの potens esse albus」である (動詞を分詞 + esse とするという考え方). この, 「白くあり得るもの」は現に存在する個体 (有限) であって, これを b_1, b_2, b_3, \dots とすれば, 15 およびその述語に関する DD 展開は次の通り.

$$\exists h \exists b (h = b) \rightarrow \exists h (h = b_1 \vee h = b_2 \vee \dots) \quad 19$$

だが, こう解した場合, 何かを $a =$ 「白いもの」ということと, $b =$ 「白くあり得るもの」ということとの関係をつける必要がある——「白くあり得るも

の」とは主=述構造説的には『『白いもの』と一致する可能性があるもの』であろう。そして、ここで「白いもの」との一致の可能性を言い表わそうとすると、結局 ⑩-2 に準じた話に行き着かざるを得ない。

2・2 解釈2, つまり現に存在しないが、存在可能な人間をも含めて考えている場合。

◎ まず主語について考える。この場合、現存する何らかの個体を指示代名詞〈illud〉を使って指していると解することはできない。つまり、14 は現実の個体に言及しているのではない。「この人間であり得るもの」と「あの人間であり得るもの」という区別ができないばかりか、そもそも、〈現在は人間ではないが人間であり得る個体〉などというものはないからである（例えば「石が人間になる」ことは可能だとしても、その変化の前後で個体の同一性は保たれない）。

従って、14 は「〈illud est homo〉〈illud est album〉と記述される状況があり得る」ということだと解さざるを得ない。つまり、その状況になって初めて、指示代名詞は指示の働きを行なうことになるのであって、可能命題を述べる現時点では指示の働きをしていない。従って、個体についても、現に「これ」「あれ」の区別ができないが、存在するならば、「これ」「あれ」の区別があることになるということになろう。この場合、主=述構造説は 12 を、次の式の左辺、またその展開を (⑩-2 と同様の分析をして)、右辺のように解するだろう¹⁵⁾。

$$\begin{aligned} \diamond \exists h \exists a (h = a) &= \diamond \exists a \{ (h^1_1 = a \vee h^1_2 = a \vee \dots) \vee (h^2_1 = a \vee \\ &h^2_2 = a \vee \dots) \dots \} \end{aligned} \quad 20$$

但し、ここでももちろん、⑩-2 と同じく、可能な個体を区別して h^n と名指すということがどのような意味で成立するのが問題である (⇒2・3へ)。

また、20 右辺にも \diamond がのこるのは a も現実に存在する個体ではないからである。従って、 h 個体と a 個体との一致ということでこれを説明し切ろうとする際には、ここで、さらに a の a^n への展開 (つまり二段階の展開) をせざるをえないだろう。

④ 解釈 2 における述語の代表に関しては、①に準じた考察ができるはずなので略。

2・3 以上、現存しない個体について語る様相命題において、主＝述構造説を貫こうとするならば、17, 20に表わされるような想定をしなければならないことに行き着いた。そこで問題は、17, 20に特徴付けられるような、可能な状況における、存在可能な個体を巡るものである¹⁶⁾。これについて私は既に、現に存在してはいないが存在可能な個体を「これ」「あれ」と区別することはできない、と主張した。従って、17, 20は、人間が何人かいて、そのそれぞれを区別することができ……といった条件をもつ状況を仮定して成立しているのであって、12 (*homo potest esse albus*) の真偽を判定するための作業に役立つものではない。つまり 17, 20 の真偽を調べることができ、それによって 12 の真偽が確かめられる、ということはないのである (17, 20 は 12 の真理条件ではない)。従って、12 は形式的には DD 展開をすることができるとはいえ、それは決して実のある展開ではなく、展開が可能であるかどうかを判別する場面では、主＝述構造説は役に立たないことが明らかである。逆に、その場面では *est homo* *est albus* ということが或る個体について同時に述べられ得るか、すなわち、そのことが矛盾を含んでいないかどうかの判別がなされている、と言いたいのである。つまり、*est h* *est a* のほうが、個体ないし個体名よりも原初的である。以上、Th. 2 の内容を論じた。

3 否定の構造

3・1 可能様相よりもはっきりと、存在しない個体が命題の中で言及される場合に、否定命題がある。そこでここにおいても主＝述構造説が崩れることを確認したい。

以下では、次の特称否定命題 (O 命題) を例にとって考えよう。

homo non est albus. (或る人間は白くない) 21

これまで引き合いに出してきた主＝述構造説による解釈は次の通り。

$\exists h \forall a (h \neq a)$ 22

即ち、「或る人間について『その人間はどの白い個体とも一致しない』といえる」ということだが、この解釈は不十分であるといわねばならない。

というのは、第一に、22 はあくまでも「存在している人間個体の或るものは、存在する白い個体のいずれとも一致しないこと」を言うものであって、主語が何も代表していない場合、すなわち、主語の指すものが存在していない場合が考慮されていないからである。しかし、オッカムの理解によれば、肯定命題はすべて主語の存在の主張を含むのに対応して、否定命題〈S non est P〉が真となる場合には、(イ) ある S について P でないと述べられる、(ロ) S は存在しない、という 2 通りの場合がある。というのも、例えば、O 命題は A 命題と矛盾的に対立する（つまり A 命題の否定である）が、A 命題が偽となる場合にはこの (イ)(ロ) の二通りあるからである。

そこで、21 が (ロ)、すなわち主語「人間」に対応する存在者がいない場合には、これに関する DD 展開はできない。「この人、あの人」という指示ができないからだ。この意味でも 22 は不十分である。

第二に、21 が (イ) すなわち存在する人間について白くあることを否定している場合にも次のような困難が生じる。人間は存在するが、白くはなく、かつ、そもそも白いものが一つもないという状況を仮定してみよう。そのような状況は可能である。その場合「ある人間は白くない」という命題は真である。しかし、この場合これを述語に関して次のように連言命題へ展開することできない。

$$h \text{ non est } a_1 \ \& \ h \text{ non est } a_2 \ \dots\dots \quad 23$$

「この白いもの、あの白いもの」と指せる個体は一つもない以上、 a_1, a_2 という名指しが成立しないからである。このように、O 命題において、たとえ主語が存在する個体を代表しているとしても、述語の代表する存在者があるとは限らない。そしてそれがない場合には、連言命題への展開という説明は妥当しないのである。従って、22 はこの場合にも適当でない。つまり、主=述構造説は (ロ) のみならず、(イ) の場合をも適切に解釈できないことになる。

オッカムは可能様相や否定命題において、項辞が代表するものが存在しな

い場合を十分考慮していた。先の DD, DDP, DC 展開は、従って、それについて展開する項辞の表示対象が存在するという条件付きで成立することとして論じられていたと解するべきである。では、そのような条件を付けないならば、一般的に否定命題の構造をどう把握すればよいのだろうか。以下で、主＝述構造説に代わる提案をしたい。

3・2 [存在否定の表記] $\langle h \text{ non est } a \rangle$ は最も一般的には $\langle h \rangle$ に対して $\langle \text{est } a \rangle$ を述べることを否定するものである。では $\langle \text{est } a \rangle$ が述べられない場合にはどのような場合があるだろうか。 $\langle \text{est } a \rangle$ の否定が述べられる場合と、 $\langle \text{est } a \rangle$ に限らず、如何なる述語も述べられない場合の二通りである、と先ず私は提示したい。前者は (イ)、後者は (ロ) に相当する。後者が (ロ) に当たることは次のように確認できる。オッカムはおよそ肯定命題は主語が代表するものの実在の主張を含むと看做している。ということは、或る主語に対して、何らかのことが述べられるならば、主語が代表するものの実在もまた主張されることになる。従って、或る主語に対しては如何なる述語も述べられない場合こそが、主語に対応するものが存在しない場合にほかならないことになる。そこで、この考えを使って、何かが存在しないことを表現することを試みたい。

$\langle d \text{ est } a \rangle$ を $\phi^a(d)$ とし ($\phi^a(\)$ が $\langle \text{est } a \rangle$ に相当、 d は特定個体を指示する語)、一般に任意の項辞 P を使う述語付け $\langle \text{est } p \rangle$ を $\phi^p(\)$ とする。

$\phi^a(\)$ 、 $\phi^b(\)$ 等の述語を値とする変数を $\phi(\)$ とする。

またこれらを使うと、 $\exists \phi(\phi(d))$ は或る述語付け $\phi^p(\)$ に付いてみれば、 $\phi^p(d)$ が成立することを表わす (つまり、これは「 d には何らか述べられることがある」の意)。すると、

或る普通名 s が表示する個体が存在することは、

$$\exists s \exists \phi(\phi(s))$$

(或る s について「 s には何らか述べられることがある」である)

ここで否定記号 \sim を導入し、命題 f の否定を $\sim f$ と表記することにする。

これらの表記法を用いて、次の提案をしたい。

Th. 3 或る普通名 s が表示する個体が存在しないことは、次のように表

記できる。

$$\sim \exists s \exists \phi (\phi (s)) \quad 24$$

これを使って、O命題 21 を書くと、

$$\exists h \sim \phi^a (h) \vee \sim \exists h \exists \phi (\phi (h)) \quad 25$$

25の前半 ($\exists h \sim \phi^a (h)$) は、或る h について「 a である」を否定しているのだが、それはまた「非 a である」と述べていることでもある(換質成立)。それに対して、後半は、「 a である」とも「非 a である」とも言えないばかりか、その他の如何なる述語付けも成立しないこと、そのような何らかの述語付けが成立するような h 個体がないことを示している。

ただし、 $\sim \exists h \exists \phi (\phi (h))$ は、どの h 個体= h_k についても $\exists \phi (\phi (h_k))$ が成り立たないこと、すなわち $\sim \exists \phi (\phi (h_k))$ から帰結することではない。〈 h 〉という普通名の表示対象が現に存在していない以上、〈 h_k 〉が固有名であればその表示対象は存在しておらず、また、指示代名詞+普通名という仕方での個体の指示は出来ないからである。

3・3 [量化記号の新しい解釈] 24のような非存在言明の表記の採用に伴って、量化記号の使い方の修正が必要となる。というのは、 \forall, \exists については通常次のような関係が付けられており、主=述構造説による命題の表記もその使い方に従っているのである。すなわち、 $f(s_n)$ を個体名 s_n を項辞として含む命題とし、 $f(s)$ は $f(s_n)$ の s_n を s で置き換えた表現とすると、

$$\sim \forall s f(s) = \exists s \sim f(s) \quad \text{また} \quad \sim \exists s f(s) = \forall s \sim f(s) \quad 26$$

つまり『すべての s について $f(s)$ である』の否定は『或る s について $f(s)$ の否定が成り立つ』である」等ということだが、ここではそもそも s といわれる個体が全く存在しない事態は排除されている。しかし 24 は s が存在しないことを表わすのであって、これに 26 を適用することはできないのである。すなわち、次の式は成立しない。

$$\sim \exists s \exists \phi (\phi (s)) = \forall s \sim \exists \phi (\phi (s)) \quad 27$$

27の右辺は「あらゆる(存在している) s 個体について、何も述べられないことがない」というナンセンスとなるからである。

そこで、わたしが採用する \forall - \exists 間の新しい関係は次のようなものである。

Th. 4. \forall - \exists 関係について、一般に次の式が成立する：

$$\sim \forall s f(s) = \exists s \sim f(s) \vee \sim \exists s \exists \phi(\phi(s)) \quad 28$$

$$\sim \exists s f(s) = \forall s \sim f(s) \vee \sim \exists s \exists \phi(\phi(s)) \quad 29$$

すなわち、これらは『すべての s について $f(s)$ である』の否定は『或る s について $f(s)$ の否定が成り立つか、そもそも s が存在しないかである』である(28の場合)といったことであり、ここでは一々提示する余裕はないが、吟味するならば、適切に事柄を表現するものであることが確かめられる。また、先の 25 と同様に、A 命題(全称肯定)、I 命題(特称肯定)、E 命題(全称否定)、O 命題を表記すれば(主語を s 、述語を P とする)

$$\begin{array}{ll} A: \forall s \phi^P(s) & E: \forall s \sim \phi^P(s) \vee \sim \exists s \exists \phi(\phi(s)) \\ I: \exists s \phi^P(s) & O: \exists s \sim \phi^P(s) \vee \sim \exists s \exists \phi(\phi(s)) \end{array} \quad 30$$

となるが、これに 28, 29 の関係を適用すれば、A-O, I-E の矛盾関係、また、反対対立、大小関係等も、伝統的説明通りに成立する(証明は略)。このようにして、28, 29 に表わされる \forall - \exists 関係はあらゆる吟味に耐え、かつ、オッカムの命題理解に適當である、と私は結論している¹⁷⁾。

3・4 以上で試みたことは、主=述構造説にかわって、 $\langle est p \rangle$ を $\phi^P()$ として一まとめで扱い、かつ、否定命題が主語に対応するものの非存在の言明である場合もあることを、命題の構造の表現に反映させることであった。その結果、我々は今や、存在しないものについても語り得る言語を手に入れている。主=述構造説は存在するもの同士的一致・不一致の話しかできず、また、通常の述語論理も何らかの個体の存在を前提にして語るしかない(「人間はいない」は「どの個体も人間ではない」ということとしてしか表現されない)。しかし、我々は今や、なにものも存在しない状況を語ることもできる。すなわち、「存在者」「もの」「個体」に相当する普通名を $\langle r \rangle$ とし、 $\sim \exists r \exists \phi(\phi(r))$ が如何なる個体も存在しない状況を表わす。そして、オッカムは明らかに、如何なる個体も存在しない状況をも視野に入れて思索を進めている。世界が創造されるに先立っては「何もなかった」が、その何もない状況を認

識する神の立場から、その状況を記述することは成立していたのでなければならぬからである¹²⁾。こうして、次のように結論したい。

Th. 5. 主語、述語を個体を指示する (代表する) 名として扱い、個体間の一致・不一致の表現として命題を把握する限りは、個体の非存在を語る言葉を持ちえない。存在しない個体について語るには、原初的述定 $\phi^s()$ を導入しなければならない。

4 個体把握と述べる言葉の分かちとしての原初的述定

最後に、以上で割り出した原初的述定について、個体との関わりを吟味し、いくつかの帰結を提示したい。

4・1 「ものに先立つ言葉」先ず、次の諸点を指摘する。

Th. 6. 原初的な述定 $\phi^s()$ は、項辞 s が表示するもの = 個体に先立つ。

「 s は存在しない」は $\sim\exists s(\phi(s))$ (s は存在しない、ないし $\sim\exists r(\phi^s(r))$ [$=\forall r(\sim\phi^s(r)) \vee \sim\exists r\exists\phi(\phi(r))$]) (s であると述べられるものはない) と表現される。これらは、 s や r の名で表示される諸個体の存在を含意しないことは既に指摘した。しかし、これらは、 $\phi^s()$ を初めとする諸述定はものがないときにも成立していることを要請する表現である。つまり、言葉がものに先立って (従って、ものの名としてではないけれども) 存在するということを、この表現は前提している。

Th. 7. $\phi^s(d) =$ 「これは s である」の成立において、 $d =$ 「これ (このもの)」に示される個体把握と、 $\phi^s() =$ 「…は s である」による (あるいは $\phi^s()$ の) 把握とが同時に成立し、主-述の分れが生じる。

個体把握なしには述定 $\phi^s(d)$ は成立しないが、逆にまた、個体 d は述べる働き $\phi^s()$ によって初めて把握されるものとなるのでもある。そのような意味で、ここにおける原初的述定は、述べる働き $\phi^s()$ による個体 d の成立でもあって、こうして、 d と $\phi^s()$ 、すなわち主・述が分かたれる。

このような理解はオッカムのもの-言葉把握と合っている。すなわちオッカムにおいて、ものを認識するとは、言葉を把握することに外ならなかった。

ものの直覚知はとりもなおさず、項辞のある種の把握だったのである。その直覚知の場とは、 d と $\phi^s(\)$ が分れる場、あるいは携える言葉 $\phi^s(\)$ によって、「これ」という個体が成立する場にほかならない。

Th. 8. 普通名である項辞 s は $\phi^s(d)$ の成立を前提に形成される。 s は、 $\phi^s(d)$ において $d (= \text{これ})$ と指された個体の名として、導入される。

4・2 [オッカムの唯名論] このようにオッカム的なものの根底を洗い出してくると、「ではこれは唯名論の崩壊ではないか」という疑問が起きるかもしれない。しかし私は、これこそオッカムの唯名論、すなわち、「言葉がものに先立つ」唯名論であると主張したい。 $\phi^s(\)$ はロゴスの側にある。もちろん s, s_n も言語ではあるが、 $\phi^s(\)$ はものの存在なしに言語の側にある。しかし、 $\phi^s(\)$ はあくまでも個体についてのみ適用でき、 $(\)$ のなかには、個体を指す名のみが入り得る。従って、これに由来する s はあくまでも個体を表示するのみである。そういうわけで、

Th. 9. $\phi^s(\)$ こそが普遍である。これは、個体についてのみ適用されるにもかかわらず、個体の存在を前提する必要なしに、また、個体に先立って、言葉の側にある。

かかる、世界に先立ち、何も存在しないことをも語れる言葉こそが、それによって世界が創られた言葉に相応しいのではないか¹⁹⁾。

4・3 [アリストテレス論理学に付け加えたもの] 本論において、我々は、可能命題についての解釈 2 の場合や、否定命題における主語が存在しない場合、というように、存在しない個体について語るという場面を特に引き合いに出してオッカム的な命題理解を分析してきた。この点に関して、最後に一言付言したい——存在しない個体、存在し得る個体について語ろうとするとともに、オッカムがアリストテレス論理学を受取りながらも、自らの存在把握を背景に、これに改変を加えた点の一つであったのではないかと。

アリストテレスには、存在する主語について、様相を付けてあるいは否定的に、何かを述べる述定把握は確かにあっただろう。それは何かを主語をもって把握したうえで、何かを述べるという構造として表現されていたものだ

ろう（それが精々『命題論』におけるものであって、『分析論』では棚上げされた述定把握であるとしても）。

また命題全体に様相（そしておそらく否定も）を掛ける理解も確かにあった。『分析論』の様相に関する換位はこの構造で命題を把握したうえでなされたのであり、オッカムはそれをアリストテレスから引き受けてはいる²⁰⁾。

では可能命題の解釈2や主語の存在が否定されるという場合はどうだろうか。それはアリストテレスにはないものではないだろうか²¹⁾。そして、それが無いということが間違いでなければ、それは両者の存在把握に関する基本的な相違を反映したものだといえるのではないだろうか。アリストテレスは現実に定位して個体把握をする。そうしたうえで、それについて何かを述べる。さもなければ、ある命題全体に関して、それが可能であるとか、かつてあったとか、明日あるだろうとか言う。しかしオッカムはさらに、現存しない個体について何かを述べるということをもする。両者の差異の要は「現存しない個体を命題に如何に取り込むか」にあるだろう。こうして、私はもう一度、オッカムにおける個体把握のあり方が根本的に「個体に先立つ言葉」理解に根をもち、その哲学および論理学を方向付けていると主張するのである。

註

本論は、1988年11月19日開催の第37回中世哲学会大会における特別報告の一部に推敲を加えたものである。オッカムの引用は次のテキストによる。巻、頁、行数を記す。

Guillelmi de Ockham Opera Philosophica et Theologica, Franciscan Institute. 1967-. (以下、*Opera Philosophica* は *OP*, *Opera Theologica* は *OT* と略記する)。

1) *OP* I. 250. 15, 255. 10, 257. 73, 260. 54, 270. 36, 276. 11 etc.

2) *OP* I. 210. 18-85.

3) DC 展開とは例えば、「すべての人間は白い」→「この人間は白い」かつ「あの人間は白い」かつ…… というものであり、DDP 展開とは「すべての人間は白い」→「すべての人間はくこの白いものかあの白いものか……」である} というものである。なお、この展開が一方向のものか、それとも矢印の右から左への推論も成り立つか

については議論があり、オッカムを擁護しようとする研究者は一方向であるとする場合が多いが(渋谷 1987 もこの立場)、私は両方向であると考えており、その点を中世哲学会大会においては論じたが、ここでは省略する。

- 4) 例えば, Swiniarski 1970., Ashworth 1973., Weidemann 1979-1, 1979-2., などは明らかにそうであり, 本論が批判的とした表記法を採用している。また, G. Priest & S. Read 1977 も二段階の展開を認める以上, 実質的にこの立場に立っているといえる。
- 5) Geach 1962. pp. 34-36.
- 6) これは “many-sorted logic with identity” と呼ばれるものである。通常の述語論理と違い, $\exists h \exists s \dots$ において, h と s はそれぞれ異なる個体領域を走る。なお註 4 参照。
- 7) Priest & Read 1977 は「人間の数は無限である」とオッカムが言っていると理解して, ここで「無限個の連言ないし選言を用い」る, 「アナクロニズム以外のなものでもない」(飯田 1987, p.75) と評されるようなシステムを採用した。しかし, これはオッカムの発言の単純な誤解である。オッカムは存在可能な人間の数は無限であると言っているのであって, 現存する人間が無限であると言っているのではない。註 14, 15 参照。
- 8) ここで念頭に置いているのは, オッカムに従えば O-命題の述語に関して DC 展開ができることになる点に向けられた, Priest & Read 1977 の批判への諸研究者の応対である。
- 9) Geach 1962. pp. 94-98. Ashworth 1973., Spade 1976., Fitzgerald 1980. 等。
- 10) *OP* I. 193, 11-21.
- 11) 個体代表以外の場合には ① が成り立たないのは, 例えば, 質料代表の場合, 「人は二音節だ」において「人」の代表するものを指して, 「これは人だ」とは言えないからである。このように, オッカムは, 述語の代表は個体代表だとまず看做して話を進めようとする。とはいえ, 主語・述語とも単純代表するという解釈の可能性を認めもする。
- 12) これは以下で述べるような, オッカムの様相命題の解釈や換位についての考えから推測したものである。従って, 註 13 等参照。
- 13) この解釈は *OT* IX. 544. 64., *OP* I. 331. 20-21, 25-26, 31-32., 等から導出した。
- 14) ただし, このような想定において, 次の点を断わっておく必要があろう。(1)この場合, それぞれの状況 w^i における白い個体 a^i_n の数は有限であるが, 可能な状況の数は無限(従って, 個体の延べ数は無限)であると考えられる。また, (2)ここで, 可能な個体を可能な状況毎に設定しなければならないのは, もし可能個体の存在領域全体などというものを設定すると, そこには, 白いソクラテス個体と黒いソクラ

テス個体とが同時に存在し、ソクラテスである限り両者は1個体であるが、白い個体と黒い個体である限り、両者は別の個体であるといった、おかしな話になってしまうからである。

- 15) ここでも先の注意が有効であって、 $h^1_1, h^1_2, h^1_3 \dots$ の個数は有限だが、可能な状況 w^i は無限にある。したがって、それぞれの状況において有限な個体の総和は無限となる。
- 16) この点について私は以前に、オッカムにおける非実在個体の直覚知について論じた際に、実在可能な非実在個体についても個別の指示ができるかのごとき発言をした(清水 1981)。しかし、今、この点は訂正する。
- 17) ただし、このように解釈すると、主語の代表についてはいいとして、述語の代表や換位についてのオッカムの発言を処理しにくくなることを認める。つまり、これもなお *illud quod potest esse s est p.* と表現される命題の構造を十分に表現していない。
- 18) *OT IX. 607. 67.*
- 19) 清水 1988 参照。
- 20) これはオッカム言う所の *sensus compositionis* と解された様相命題に該当する。これに対して、本論で取り上げた様相命題は *sensus divisionis* と解されたものである。
- 21) 中世哲学会大会における報告に対して、ここで言う解釈2について、アリストテレスには一か所この理解が提示されているが、議論が展開されていない(従って、この点で本論の主張はそれほど見当違いではない)との趣旨のご指摘を、山本巍氏から頂いた。

引用文献

- Geach 1962 : *P. T. Geach, Referance and Generality.*
- Swiniarski 1970 : J. Swiniarski, A New Presentation of Ockham's Theory of Supposition with an Evaluation of some Contemporary Criticisms, *Franciscan Studies* 30 (1970).
- Ashworth 1973 : E. J. Ashworth, Priority of Analysis and Merely Confused Supposition, *Franciscan Studies* 33 (1973).
- Spade 1976 : P.V. Spade, Priority of Analysis and the Predicates of "O"-Form Sentences, *Franciscan Studies* 36 (1976).
- Priest & Read 1977 : G. Priest & S. Read, The Formalization of Ockham's Theory of Supposition, *Mind* 86 (1977).
- Weidemann 1979-1 : Hermann Weidemann, William of Ockham on Particular Negative Propositions, *Mind* 88 (1979).

- Weidemann 1979-2 : Wilhelm von Ockhams Suppositionstheorie und die moderne Quantorenlogik, *Vivarium* 17 (1979).
- Fitzgerald 1980 : M. J. Fitzgerald, Ockham's Implicit Priority of Analysis Rule? *Franciscan Studies* 40 (1980).
- 渋谷 1987 : 渋谷克美「オッカムの『個体代示』 suppositio personalis についての解釈」(『中世思想研究』 XXIX 1987).
- 飯田 1987 : 飯田隆『言語哲学大全 I』(勁草書房 1987).
- 清水 1981 : 「実在の偶然性—何故オッカムは非実在個体の直覚知を主張したか—」(『中世思想研究』 XXIII 1981).
- 清水 1988 : 「オッカム唯名論の世界把握」(季刊『哲学』 2 哲学書房 1988).